

主 題：神による救いと人による救い**聖書箇所：ローマ書9章30－33節**

先週の水曜日に婦人会の食事会があって、私たちはここからバスでレストランまで出かけたわけですが、その時に私は一番前に座ってバスの運転手と話をしました。いろいろとおもしろい話があって、彼から「車で走っていると、よく『神と和解せよ』というサインを見かけることがあるのですが、あれはどういう意味なのですか？」と質問されました。そこで当然のことながら、どういう意味か説明をしました。私たち人間はみな、父なる神と和解する必要があること、私たちは罪の赦しを受けることが必要であり、そのために神に逆らっている罪を悔い改めて主イエスによって備えられた救いを信仰をもって信じ受け入れなければならないこと、そのときに、この救いをいただいた時に私たちは神と和解することができるということ、これらのことを話したわけです。

神との和解、これはすべての人間に必要なことです。言い方を変えるなら、救いはすべての人に必要だということです。パウロはこの「神との和解」ということを語った時に救いのことを話しています。そして、今私たちが学ぼうとしている今日のテキストであるローマ人への手紙9章のところでも、彼は救いについて教えています。特に、30節から見ると、パウロは「異邦人の救い」と「イスラエルの救い」を対比しながら、この大切な救いについて話をするのです。これを学ぶ前に、私たちがもう一度、考えておきたいこと、皆さんに思い出していただきたいことは、ローマ教会の人々は多くの異邦人が救われている様子を見て、そして同時に、あのイスラエル、ユダヤ人たちがそれほど救われていない様子を見て、いったい何が起こったのかと疑問を抱いたということです。あれほどのすばらしい約束をいただいたイスラエルが、どうしてこの救い主イエスを受け入れないのか？どうして主イエスに逆らい続けるのか？神の約束はすべてのイスラエルが救われることではなかったのか？では、神はどうなってしまったのか？神は約束を破られたのか？と、このような疑問を抱いたのです。そして、パウロはもうすでに、神は約束を守っておられる、神の約束は必ずその通りになるということを説明して来ました。

☆人が救われるために必要な二つのこと

もちろん、私たちが学んで来たように、「イスラエルが救われる」と言ってもすべてのイスラエル人が救われるということではありませんでした。そして、パウロはこの救いに関して大切なことを教えたのです。人が救われるために必要なことをパウロはここで二つのことを教えています。

1. 神の選び 6－29節

一つ目は神の選びでした。そのことは6－29節までにパウロが教えました。特に、9：11を見ると、「その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方によるようにと、」と選びの話をしています。21－23節でも陶器と陶器師の話からそのことを教えようとしています。ですから、罪人が救われるためには神の選びが必要です。選ばれた者たちだけがこの救いに至るのです。そして、そこにはイスラエル、異邦人の違いはないということをパウロは教えてくれました。そのことを私たちはすでに見て来たのです。

2. 神の義を得ること 30節

そして、人が救われるために必要な二つ目のことが30節に記されています。「では、どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すなわち、信仰による義です。」とあるように、義を得ることです。30－33節を見ると、パウロは「信仰による義」と「義の律法」とを対比しています。それはこの箇所を読むなら明確です。10：1－4を見ると、そこでは「神の義」と「自分自身の義」を対比しています。そして、10：5－13では「信仰による義」と「律法による義」を対比しています。パウロはこのように対比することによって、余り詳しい学びを受けていなかったローマ教会の人々に、救いについての大切な教えを与えているのです。私たちはどのようにすればこの救いに与るのか、そのことをパウロは教えるのです。

今日、私たちが学ぼうとしている30－33節では、「信仰による義」を求めた異邦人と「義の律法」を追い求めたイスラエルについてパウロは教えます。繰り返しますが、では、異邦人のすべてが救われたのかということとそうでもないし、イスラエルのすべての人が滅んだのかということとそうでもありません。しかし、イスラエル人と異邦人とを対比しながらパウロが言いたかったことは、この大切な救いとはいったいどのようなものであり、どのようにしてそれを得ることができるのかを教えようとしたのです。

A. 異邦人の救い 30節

ごいっしょにみことばを見て行きますが、まず、30節でパウロが教えることは「異邦人の救い」で

す。パウロはここで彼らは義を得たと記しています。すなわち、彼らは救われたということです。この「得ました」と記されている動詞ですが、「到達する、それをつかむ、手に入れる」という意味のあることばを使っています。ですから、異邦人たちはこのすばらしい「義」を自分たちの手に入れたと言うのです。その手段についてもパウロはここで教えています。30節の後半に「信仰による義です」とあります。つまり、パウロが言っていることは、異邦人たちは福音のメッセージを聞いた時、それを心から受け入れたということです。そして、その信仰によって彼らは義を得たと言うのです。

確かに、この30節の最初に、異邦人に関して「義を追い求めなかった異邦人は」とあります。そこがイスラエルと違うのです。イスラエルは契約が与えられました。律法が与えられました。創造主についても教えられていました。しかし、私たち異邦人は何も知らなかった。ほとんどの皆さんは、教会に来られるまでイエス・キリストのことはご存じなかったでしょう。私も教会に行くまでは聖書を見たこともないし、イエス・キリストという名前は知っていましたが、それがどういう方なのか全く知りませんでした。まして、モーセの律法なんて聞いたこともない。映画で見たことがあっても、それが聖書から来ているということも知らなかった。まさに、そういう状態にあった異邦人です。でも、神はそういう人々に対してあわれみをもって救いへと導いてくださったのです。福音のメッセージを通して、異邦人はそれを信じるという信仰によって自分のものとしたというのです。

ローマ3：22にはこのことについてこのように言っています。「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。」と。「義」、簡単に言えば「正しさ、正義」です。そして、なぜこれが必要かという、この義を得ることなくしてはだれも神の前に立つことができないからです。この「義」を得ていない者はすべて神の前でさばかれる者であり、神の前に立つことはできません。なぜなら、聖書の教える私たちの神は正しく聖いお方であるために、あらゆる罪、どんな小さな罪でも、それを憎んでおられるからです。ですから、私たち罪人はこの神の前に立つその瞬間に滅ぼされてしまう、さばかれてしまうのです。完全に聖いこのお方の前に滅ぼされずに立つことのできる者は、完全に聖く完全に正しい者だけです。だから、パウロが言うことは、イエス・キリストが成してくださった贖いのゆえに、主イエスを信じるすべての者を神はこの人は正しい、この人は聖いと宣告してくださる、この人は義人であると神が宣告してくださると言うのです。それが救いです。そのように神は私たちをこのようすばらしい救いへと招いてくださり、そして、神の前に立つことを赦してくださったのです。

◎ イエス・キリストが十字架に架かれた理由

私たちが救われるために必要なことを二つ見えています。「選び」、そして、「義を得ること」です。少し考えていただきたいことがあります。信仰者であるあなたは神が選んでくださったから救われたのです。しかし、その選びだけですべてが終わるのなら、なぜ、イエス・キリストは人としてこの世にお見えになり、十字架に架かり復活されたのでしょうか？イエスがこの地上にお見えになって「信仰者の皆さん、選ばれた皆さん、このように生きなさい。」と言われて昇天なさってもよかったのです。ところが、イエス・キリストはこの世にお見えになって、十字架であなたの身代わりとなって死んでくださり、三日目によみがえってくださったのです。ですから、確かに、罪人が救われるためにそこに神の選びがあり、それゆえに人は救われるのです。しかし同時に、選ばれた者たちはこの神の義を自分のものとしなければいけないのです。そして、私たちがその義を得るためにイエス・キリストはこの世に人として来てくださり、十字架でいのちを捨ててくださったのです。私たちはこの福音のメッセージを聞き、そのメッセージを受け入れました。感謝なことに、信仰によって神はあなたを義人と呼んでくださったのです。そのように宣告してくださった。ですから、今私たちは神の前に自由に立つことが赦されたのです。パウロは先ず、30節でこのことを言うのです。

B. イスラエルの救い 31-32節

そして、31節から話ががらっと変わります。「しかし、」とあります。31—32節を見ると、今度は異邦人の救いからイスラエルの救いへと話が変わります。パウロは「しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。」と言います。イスラエルの人々は義を得なかったのです。すなわち、救われなかったと言っているのです。いったい、何が問題だったのでしょうか？彼らは「行ないによって救われる」と思っていたのです。彼らは「義の律法を追い求め」ていたとあります。律法は義を得る手段を私たちに教えてくれます。パウロがここで言っているこの律法とは恐らく「モーセの律法」を指しているわけですから、モーセの律法を見る時に詳しい説明は必要ないと思います。そこには、こうしなさい、このように生きなさいというたくさんの要求があります。しかし同時に、律法を学んで行くと、神の義を得るためには神の助けが必要であるということを私たちに悟らせてくれます。神が要求していることを私たちが満たして行くためには、神の助けがなくてはならないということを私たちに示してくれます。しかし、この律法を学んでいたユダヤ人たちは、そのことに気付かず、そのことを無視

して、自分たちの力で神の義を得ることができると本気で考えたのです。それが問題だったのです。それが過ちだったのです。その結果、彼らは「その律法に到達しませんでした」とパウロは言うのです。「到達する」という動詞も「獲得する」という意味を持ったことばです。

3 2 節には到達しなかった理由が書かれています。「なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。」と、彼らは異邦人のように信仰によって求めたのではなく、行ないによって律法が提供すると言ったこの「義」を得ることができると思って、そのように歩んだのです。しかし、もうお分かりのように、律法を完璧に守ることのできる人は主イエス以外にだれひとりとしていないゆえに、どんなに頑張っても、律法が約束した義を得ることは不可能でした。ですから、パウロはそのことをここで言うのです。イスラエルの人々は「義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした」と。この「追い求める」ということばは「非常に熱心に」という意味があります。一生懸命やっていたのです。確かに、今でもイスラエルに行くとそのことが分かります。人々は熱心に律法を守ろうとしています。でも、どんなに熱心にそれらを守ろうとしても、もし、それが真理と結びついていなければそこには何の祝福もありません。10 : 2に、「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」とあります。行ないによって救い、義を得ることができると信じていた彼らは決してそれを得ることはなかったと言うのです。

C. 神の手段：救い主イエス・キリスト

このことを教えた後パウロは、では、どうすれば私たちはこの「義」を得ることができると、その手段について教えます。彼は「それは主イエス・キリストによってのみだ」と教えるのです。そのことを見る前に、律法について少し考えておきたいと思います。

1. 律法が明らかにしてくれたこと

律法は次の三つのことを明らかにしてくれます。

1) 神が私たちに望んでいることを明らかにする

まず、神が私たちに何を望んでおられるのか、そのことを明らかにします。神がアダムとエバをお造りになって彼らを置かれた場所はエデンの園でした。そして、まだ罪を犯していないふたりに神はあることを命じるのです。園の中央にある木の実に関することです。創世記2 : 16 - 17 「神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」。皆さん、お気づきになったでしょうか？これが神があなたに望んでいることです。神の望んでいることをこのように命令としてアダムとエバに与えたわけです。ですから、このように言えます。律法とは、私たち人間にとっての行動の原理です。このように歩んで行きなさいということを律法は私たちに教えてくれるのです。神はあなたがこのように生きることを望んでいるということを明らかにするのです。ですから、律法には様々な命令があるのです。このようにしなさい、これをしてはいけない、このように生きなさいと、私たちの行動に関して律法はその原理を明らかにしてくれます。

2) 救いの必要性

二つ目に律法が明らかにしたことは、私たちには救いが必要であるということです。救いの必要性を私たちに教えてくれます。

(1) 罪の自覚をもたらす = 罪を明らかにする

律法を通して私たちは罪の自覚を得ます。このローマ人への手紙3 : 20を見てください。「なぜなら、律法を行なうことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」とあります。同じように、7 : 7には「それでは、どういうことになりますか。律法は罪なののでしょうか。絶対にそんなことはありません。…」、律法は正しいものです。神の基準を明らかにしているものです。「ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。」とあります。ですから、律法を通して私は神の前に罪人であるということが明らかになったのです。私たちはこの律法に、また、みことばに触れるまで、そんなに悪い人間だとは思っていませんでした。私がイエス・キリストを信じる前に、たとえばだれかがやって来て「あなたは死んだらどこへ行くと思いますか？」と聞かれたら、私は即座に「天国です」と答えたと思います。「なぜ、天国に行けると思うのですか？」と聞かれたら、「そんなに悪いことはしていませんから。私は法律を犯してもいないし、警察の厄介になったこともない。だから、私は天国に行けるに違いない」と。恐らく、皆さんもそのように思っておられたときがあったでしょう。しかし、私たちは聖書に触れた時に初めて、人と自分を比較するような世界に生きて来て、そのような世界しか知らなかった私たちが、神と私の関係を通して自分を見ることになったのです。神が私をどのように見ておられるのかということを見た時に、この聖い神の前に立つことのできない存在だということに気づくわけです。聖書に触れて初めて、神が私のことを罪人と呼んでおられるということに

気づきました。そして、そのことに対して反論ができませんでした。なぜなら、律法は私にこのように生きなさい、私を造られた創造主はこのように生きなさいと私に命じておられるけれど、私はそのように生きていないからです。神の前に自分が罪人であることが明らかに分かりました。律法は私たちに自分自身の罪を示してくれます。その自覚をもたらします。

(2) 神の怒りを明らかにする

また同時に、ローマ4：15では「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反ありません。」と私たちに言います。「怒りを招く」、つまり、神の怒りというものがあるということ、神は私の罪に怒っておられると、そのことを明らかにしたのです。それまでそんなことなど知りませんでした。皆がやっているからいいではないか、人に迷惑をかけないからいいじゃないかと。ところが、神に逆らうこと、神の前に罪を犯すことは神の怒りを買っていることだと言うのです。神はその罪に対し怒りを持っておられるのです。もちろん、悪い行ないをすることも、悪い心を抱くことも悪いことばを発することも、悪い態度もその通りです。私たちのすべてに対して神は怒りを持っておられると、みことばはそのことを明らかにしたのです。

ですから、この律法というものは、全人類が罪を犯し神のさばきを受けなければならないと定められているということを私たちに啓示しているのです。ローマ3：19には「さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」とあります。私たちはだれ一人として神の前に反論できないと言うのです。私たちはみな、生まれながらに自らの罪ゆえに例外なく地獄に向かっているのです。神の永遠のさばきに向かっているのです。「でも、この人はすばらしい人です」と言っても、その人も神の前に罪を負っているゆえに永遠の滅びに向かっています。「義人はいない、ひとりもない」(3：10)と言います。神の前に正しい人はひとりもないのです。私たちが思っても神はそうお思いにならない、すべての人は罪を犯していると教えます。律法はこのように、神が私たちに望んでいることだけでなく、救いの必要性も教えてくれました。

◎ ユダヤ人たちの問題

しかし、ユダヤ人たちの問題は、自分自身はその命令に服従していると信じ込んでいたことです。彼らの問題は、自分自身の努力で神の慈しみを勝ち取ることができると考えていたことです。自分が頑張れば、一生懸命やれば、永遠に続く神の祝福を得ることができるかと彼らは考えたのです。それが彼らの過ちでした。でもよく考えてみると、それは私たち人間が作り出した宗教と共通しています。「頂上に行くために道はいろいろとある」とよく言います。私たちはいろいろな方法で頂上を目指し、そして、結果的にみな頂上にたどり着くというのです。私たちがかつて信じて来た様々な宗教は、一生懸命頑張ることを教えました。徳を積むこと、様々な修行をするように、そうすれば、結果的に祝福を得ると。

私たちが考えなければいけないことは、果たして、それが聖書の教えていることかどうかです。先ほどローマ10：2で見たように、どんなに熱心であったとしても、それが真理に基づいていなければ空しいということです。これだけ頑張ったのだから神はそれを見て「ほんとによく頑張った!」と言われるか?言われません。

お話したことがあるかと思います。小学校6年生の時にプールの検定の試験がありました。その当時はバタ足で進みます。手を前に伸ばして目を閉じて、そして、足をバタバタしながら前に進んで行くのです。13メートルのプールなんて一発で泳げると思っていました。私の番がやって来て私は泳ぎ始めました。でも、泳いでも泳いでも対岸に着かないのです。「おかしい、どうしたんだろう」と思いながら息の続く限りバタバタやっていました。最後に、もうだめだと思って立ち上がったらプールの真ん中にいたのです。みな「近藤、お前100メートルほど泳いだよ!」と言うのです。どういうことか、どういうわけか私は目をつぶって泳いでいたので、ぐるぐるぐるぐる真ん中を回っていたのです。いつまでたっても向こうに着かなかった。「確かに100メートル泳いだ」と言ってくれましたが、私はそのテストにはパスしなかったのです。どんなに私たちが努力をしても、どんなに人々が認めてくれたとしても、検定はプールの反対側に着くことです。

イスラエルの問題は何かだったのか?神はこの律法を通して私たちに救いが必要だということを明らかにされました。しかし、彼らは自分で自分を救おうとしたのです。自分たちの考えで、救いを、この義を得ようとしたのです。そこに問題があったのです。そして、パウロは言うのです。「義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした」、義を得ることはできなかった、それは彼らが行ないによってそれを得ることができると思っていたからであると。

3) 救いは従順の報いであることを教える

律法が明らかにしてくれた三つのこと、一つ目は、神が私たちに望んでいることが何かを明かにしてくれました。ですから、律法というのは非常に大切なのです。神が何を望んでいるかが明らかになりま

した。二つ目に、律法を通して私たちには救いが必要だということを悟らせてくれます。だから、大切なのです。三つ目に、律法が明らかにすることは、この「救いは従順の報いだ」ということを教えるのです。律法が私たちに教えたことは、この主なる神の命令に対して私たちが従順に従って行くなれば、その結果として、救い、永遠のいのちをいただくということです。この律法を完璧に守るなら救われるのです。永遠のいのちを得るわけです。律法は私たちに完全な愛、完全な従順を要求します。そして、それを完璧に守れば私たちは救われるのです。しかし、私たちが知っていることは、それを守ることは私たちに不可能だということです。

ヤコブ書でヤコブはこのように言っています。2：10「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」と。90%守っているから合格か？神の要求は100%です。たった1回しか罪を犯していない、それでもあなたは律法を犯した者と神はそのように見るのです。だから、私たちに神のあわれみが要るのです。神の救いが必要なのです。救い主が必要なのです。

2. 救い主イエス・キリスト

1) 律法の要求を完全に満たされた唯一のお方

救い主イエス・キリストのことは見ると、彼はすべての点で律法に服従されました。彼だけが律法の要求を完全に満たされた唯一のお方です。だから、神は彼を喜ばれたのです。彼は私たちと同じように義を得る必要がなかったのです。彼は自分の行ないをもって、自分が義なる者であることを明らかにされたのです。

2) のろわれている私たちに救い出してください

実は、私たちはみことばによれば神の前にのろわれた者であると教えられています。ガラテヤ人への手紙3：10に「というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。『律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。』」とあります。つまり、律法のたった一つでも犯しているならあなたはのろわれていると言うのです。神の怒りがあなたの上に留まると言うのです。神のさばきを受けると言うのです。

そこで、イエスが何をされたのか？イエスだけが律法を完璧に守られました。イエス・キリストはすべての点で神の前に受け入れられる完全に正しい者でした。そのイエス・キリストが、この世に人として来られて、そして、あなたのすべての罪を負って身代わりに十字架で死んでくださった。そして、主は約束どおり三日後にそこからよみがえって来られた。それは何を意味しているのか。主イエス・キリストがあなたに代わってのろわれた者となってくださったと言うのです。「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」（ガラテヤ3：13）とあります。のろわれているから、忌み嫌われるようなところで処刑されるのです。そこに架かるべき者は私たちです。律法を完璧に守った正しいお方であるイエス・キリストが、あなたに代わってあなたののろいを受けて十字架で死んでくださったのです。そして、それだけではありません。あなたに主イエス・キリストご自身の義を与えてくれたのです。これが救いなのです。主はあなたからそののろいを取ってください、主はご自分が持つておられたその義をあなたに与えてくださったのです。今私たちが、この聖い神の前に立つことが赦されたのは、神の律法が要求するすべてのことを守られた主イエス・キリストを信じたからです。すべてのことを完璧に守られた、この方の義が私に与えられたから、私は義なる神の前に立つことができるのです。キリストの贖いのゆえです。

「ペーカ神学辞典」の中にはこのように説明を加えています。「キリストの従順が我々の従順とされたように、キリストの従順が信じる我々の従順とみなされる。」と。神は私たちが従順であったかのように見てくださると言うのです。「キリストの従順が我々の従順とされたように、我々の不従順の当然の報いである、律法の裁き、神ののろいと怒りがキリストに下され、我々は永遠のいのちの条件である道徳的従順から、さばきから、さらにのろいから解放されているのだ」と。神はあなたからののろいを取ってくださいました。神はあなたから永遠のさばきを取ってくださいました。そして、その代わりにあなたにご自分の義を与えてくださったのです。主はこのようなみわざを私たちのために成してくださいました。

3. 神が与えてくださった唯一の手段

こんなにすばらしい救いがあるにもかかわらず、こんなにすばらしい救い主がおられるのに、イスラエルは自分自身で義を得ることができると考えていたゆえに、救い主など必要ないとしてこの救い主を拒むのです。32節の後半にあるように「彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」。33節はイザヤ書28：16から引用されています。「それは、こう書かれているとおりです。『見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。』、イザヤ28：16「だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。』、ここに記されている「つ

まずきの石」とは主イエス・キリストのことであることが明らかです。ペテロはペテロの手紙第一の中でこの石に関してこのようなことを教えています。I ペテロ 2 : 6 - 8 「なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」:7 したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった。」のであって、:8 「つまりきの石、妨げの岩。」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。」。

神が備えてくださったこのすばらしい「救いの石、救いの岩」に彼らはつまずいたと言います。なぜなら、このように努力すれば、このように頑張れば、このように一生懸命熱心にこの教えを守り続けて行くなれば、私たちは救いに与る、この神の義を得ることができるというのです。そんな救い主など私には必要ないと、そのようにしてつまずいたと言っているのです。悲しいことに、そういう人々が今の世の中にもあふれているのではないですか？イエス・キリストの救いを信じるだけで救われるなんて、そんな簡単なことと、彼らも同様に、この「つまずき石」につまずいているのです。この石に関しては、使徒の働き 4 : 10 - 11 でも「皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。:11 『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というはこの方のことです。」と使徒たちが宣言しています。明らかに、ここでペテロ自身がこの石はイエス・キリストのことであると話しています。そして、12 節では「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」と言います。このイエス・キリストだけが、罪人である私たちに、神の怒りを買って当然の私たちに、神の前にのろわれた者である私たちのために備えられた救いの岩なのです。神が備えてくださったこの救いを拒んだイスラエル。

確かに、この救いを得るためには義を追い求めることが必要です。私たちは義を追い求めなければいけません。しかし、「義を与えてくださる神が備えてくださった手段によってのみその義を得ることができる」ということです。この義を、この救いを与えてくださるのは神です。その神が備えてくださった手段によってのみ、私たちは救いを得ることができる、当然のことではないですか？しかし、人間は様々な方法によってそれを得ることができるというのです。つまり、彼らは神の備えてくださった手段ではなくて、自分勝手な手段をもってその救いに到達できると思っているのです。神は言われます。そんなことはあり得ないと。主イエス・キリストだけがこの救いを信じる者に与えることができる方です。なぜなら、「この方以外には、だれによっても救いはありません。」というからです。私たち人間が救われるべき名として神が私たちに与えてくださった救い主、それは釈迦でもモハメッドでもありません。いろいろな教祖でもないし、偉人と呼ばれた人々でもありません。イエス・キリストしかいないのです。それが神が私たちにこのみことばを通して教えてくれることです。ユダヤ人はこの救い主に頼って、この救い主を信じて、救いをいただくという神の手段を全く無視して、自分たちでそれを得ることができると思ったのです。

最後に、パウロはイザヤ書のみことばを引用しながらこのように言いました。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」と。この「失望させる」という動詞も「恥じる、恥をかく」といった意味を持ったことばです。レオン・モリスという神学者は「バルトマーは「失望する」ということばは旧約ではさばきと関連している」とそのように説明を加えています。ですから、ここで言っている「失望させる」ということばはさばきと関連したことばなのです。だから、これはいつのことか分かりますね？主の前にさばきを受ける時です。主の前に立つ時のことです。その時に恥を受けることがない、失望することがないというのです。信仰者の皆さん、あなたが神の前に立つ時に、イエスを信じたなら罪が赦されて永遠のいのちをいただくと思っていたけれども、そうではなかった！とあなたが失望するようなことは絶対にないというのです。そんなことは絶対に起こらないというのです。神の約束です。そこであなたは失望することも恥をかくこともないのです。悲しいことは、イエス・キリスト以外に救いがあると言って、確かに熱心であったとしても、この神の備えてくださった救いを受け入れなかった人たちです。つまり続けている人々です。この人々は間違いなく、自分は天国に行けると思っている、神の前に立つ時に彼らは失望します。恥をかきます。彼らが間違っていたことがそこで明らかになるからです。

信仰者の皆さん、だから、私たちはこのイエス・キリストを宣べ伝えるのです。私たちの考えを宣べ伝えるのではありません。この主イエス・キリストを宣べ伝えるのです。なぜなら、このイエス・キリストだけが私たちにこの義を、救いを与えてくださるお方だからです。パウロは I コリント 1 : 23 でこのように言いました。「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」と、これが私たちのメッセージです。人間の考えなどどうでもいいのです。私たちが語り続けて行かなければいけないことは、このイエス・キリストが私たちに罪から救ってくださる唯一の救い主であること、神の義を得

るためには、このイエス・キリストを信じる信仰しかないということです。

パウロは言います。「ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、」（Iコリント1：23b）、人々がどう思うかなんて関係ないのです。この真理によって救いに与った私たちは、この真理を確信をもって語り続けて行くのです。信仰者の皆さん、私たちは出て行かなければいけないのです。なぜなら、私たちの周りにはこのメッセージを知らない人たちであふれているからです。自分の家族の中にも、自分の周りにも、職場にも、学校の友だちの中にもこの救いを知らない人たちがあふれています。私たちはそこに出て行って、このイエス・キリストに信頼する者は絶対に失望することがない、なぜならこの方だけが神の義を与えてくれるから、救いを与えてくれる方だからと、このメッセージを携えて出て行くことです。神は私たちを確かに選んでくださった。それだけではありません。神はこのようすばらしい義を備えてくださり、そして、私たちはその義を信仰によって得たのです。その方を誉め称えながら、私たちはその方を大いに証し続けて行くことが必要です。このメッセージを携えて出て行ってください。キリストの証人として、この神の義を得た者として…。

《考えましょう》

1. 義を得るためには、何をしなければなりませんか？
2. なぜ多くのユダヤ人たちは、石である主イエスにつまずいたのでしょうか？
3. 人間の作った宗教の共通した問題点は何でしょう？